1-2 沿岸防災手法の工学的評価

	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
日本海側沿岸の海 象特性と沿岸防災 手法								
海岸堤防の津波減 災性能と限界								
沿岸低地における 津波の氾濫予測					北海道 東北	北陸 西日本		
日本海沿岸に適し た津波防災手法								

日本海地震・津波調査プロジェクト運営委員会 2016年9月28日(水)

山中・佐藤・田島・下園・佐貫:線形ブシネスク理論に基づく高速津波計算システムの構築, 土木学会 論文集B2(海岸工学), Vol. 7, No. 2, I_206-I_210, 2014

研究の背景/目的

適切な防災・減災計画を策定するためには、 各地域・地区における最大クラスの津波高を 推定する必要がある。

市町村ごとに津波高を推定する必要がある が、市町村ごとに津波の伝播計算を実施す るのは非効率である。

<u>研究の目的</u>: 任意の波源から来襲する津波波形を短時間で 推定できる高速津波計算システムの構築



(出典:時事ドットコムホームページ)

高速計算の概念ー単位波源の導入ー

支配方程式が線形のとき、解の重ね合わせが成立する(伊藤ら,2013)



単位波源の形状~ガウス分布形状



単位波源の大きさの選定





 1. 断層モデルの推定精度は数十kmのオーダー
 2. 1964年アラスカ津波では20~30km程度の短 波長の津波が発生



単位波源の大きさと計算精度の関係



σ=5km,水深3kmのときの誤差は40%程度

ブシネスク方程式の計算精度

計算格子間隔と伝播距離による計算精度

ー次元水平床水路に単位波源を置き、線形長波理論に基づく伝播計算を行う

▶単位波源は相似形を保って伝播する保存解となる

数値的に得られる波高/理論的に得られる波高=計算精度



単位波源のデータベースの構築

支配方程式:球面座標系平面二次元ブシネスク方程式(後藤,1991)

差分法:二段階混合差分法(岩瀬ら,1998)

単位波源の大きさ:σ=5km

単位波源は新潟県佐渡島北方沖に配置し、鳥取県沖における水位変動(150分間)を記録



初期波源を単位波源の重ね合わせに変換

- 1. Okada(1992)とTanioka・Satake(1996)より初期 水位分布を求める
- 2. ガウス分布の重み関数を用いて初期水位分布 に移動平均を施す
- 3. 初期水位分布を二次元ガウス分布の重ね合わ せとして次式で表す

$$\eta_0(x, y) = \sum_{i=1}^m \sum_{j=1}^n a_{ij} \exp\left[-\frac{(x - x_{ij})^2 + (y - y_{ij})^2}{2\sigma^2}\right]$$

η₀:任意格子点の初期水位 a_{ii}:単位波源の高さ

4. 各格子点の水位が一致するように、単位波源の 高さを選点法(ガウスの消去法)により決定する



計算結果の確認







│ (2) 単位波源群の要素の解の重ね合わせ (2 │ (3) 単位波源群伝播計算 // -

(2)と(3)の津波波形は完全に 一致しなければならない



波源特性の分析

大きさや形状を変えずに単位波源群を平行移動 ▶波源位置の変化による応答の変化を考察





波源位置が変化した時の最大水位/波源初期位置での最大水位

応答倍率の定義:

12/13

まとめ

山中・佐藤・田島・下園・佐貫:線形ブシネスク理論に基づく高速津波計算システムの構築, 土木学会 論文集B2(海岸工学), Vol. 7, No. 2, I_206-I_210, 2014

- ・線形ブシネスク理論+ガウス分布単位波源
 →任意地点の津波波形を高速に計算するシステム
- ・ 波源の不確実性 ↔ 最大津波水位の確率分布
 → 特定地点に最悪の被害をもたらす津波波源を、市町村レベルできめ細かく検討できる

2016	2017	2018	2019	2020
沿岸の津波	陸上氾濫の 確率分布	氾濫被害のリ スク分析	被害軽減対 策の効果	日本海側に おける最適な 津波防災

津波計算システム

13/13





断層パラメータ入力

)	緯度(°)	経度(°)	深さ(km)	走向(°)	傾斜(°)	すべり角(°)	長さ(km)	幅(km)	すべり量(m)
1	37.061	136.5533	0.7	150	30	42	26	13	2



時間(min)